
届けこの想い

masacchi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

届けこの想い

【Nコード】

N7258C

【作者名】

masacchi

【あらすじ】

基本的に恋愛小説です。が、これからの展開は、作者である私にもよく分かりません（おいおい）

別れ（前書き）

初めまして。小説初心者です。
ければお読みください。

読みにくいと思いますが、よろし

別れ

一弥は、幸せだった。

そう。あの日、あの時、あの出来事がおこるまでは。

「今日も1日お疲れさま。」

一弥は、とびきりの笑顔で、声をかけた。
相手は、正美。

「うん、一弥もね。」

一弥の胸は、幸福感ではちきれそうだった。

一弥は思い出す。

ちょうど、1年ほど前、

一弥は、正美のまえで、ぼろぼろ泣いた。

「ごめん。本当にごめん。僕が悪かったんだ。」

一弥は、必死で謝った。

そうする間も、涙は止まらなかった。

まさみも泣いていた。まさみは、言った。「かずやが、今日、なん
で、私を誘ったのか、なんとなく感じてた。かずやのいおうとして
ること、気持ちを言葉では、理解したつもり。でも、内面的ってい
うか、自分でもわからないんだけど。私のほうこそ、ごめん。」か
ずやは、じっと、聞いていた。

一弥は、涙を拭いて顔を上げると、

「そうだよ。正美のことだから、気づいてるんじゃないかと思っ
たよ。」

と、辛そうな、そして、少しだけ嬉しそうな、微妙な表情で、呟い
た。

そのかずやの言葉を聞いたまさみは、真剣な眼差しで、かずやの顔
をじっと見つめ、視線をさまよわせていた。どこか気まずい空気を、

二人は感じていた。沈黙を破ったのは、まさみのほう。「大丈夫だから。」、まさみは、眼に光るものを浮かべながら、毅然として言った。

一弥は、正美の気迫に圧倒されて、ただうなづくことしかできなかった。

ふたりは、互いに微妙な表情で、静かにその場を離れたのだった。

別れ（後書き）

いかがでしたでしょうか？ もちろん、わかったとおもいます。すみません。でも、私の勉強のため、評価や、感想の送信を、よろしく願います。ご指摘、ご批判なども、どんどんいただきたいです。つぎは、おそらく、月末になると思います。おたのしみに（してないわー）。

築き（前書き）

遅くなりました。
ください。

あと、なんかおかしいです。

よければお進み

築き

かずやは、1年前の、その1日の思い出に、今一度思いを馳せたのであった。

そして、今、自分の前の現実を思ったとき、かれの胸はなぜか詰まったのである。

この1年の日々が、今、かれの脳裏を走馬燈のように駆け巡っている。

思えば長い1年間だった。

（あの1年間は、僕にとってなんだったんだろう？）

一弥の頭の中に回り続ける疑問。

今の二人の間は、沈黙が立ちこめている。

いつまで続くとも知れぬ沈黙が。（一弥ったら、また考えてるのね。あれだけ無駄だと言ったのに。）

正美の、心の中で、ふっとため息が漏れた。

二人は、それぞれの思いを胸に違う方向へと、ゆっくり歩きだした。この青年たちの未来は、はたして、どういう色になっていくのだろうか。

ときに、傷つき、立ち止まりながら、それでも、自分なりの色を作っていくのではないだろうか。いや、

不器用に、見つけていくのかもしれない。しかし、たとえどんなことがあったとしても、二人の心の奥底には、互いが存在し、生きていく支えになるのではないだろうか。

たとえ会えなかったとしても、たとえ話せなかったとしても、

お互いに心の中の相手をはげまし、元気づけ、

それによって自分も元気になる。

そんなすばらしい関係を築いてゆけるのではないか。

今、二人は、小さな、しかし、大切な気づきをしたのである。

人を深く理解する、いや、互いに、互いを、より深く理解し合うこととの大切さを。

二人にとって、後で、振り返れば、青春の甘酸っぱい思い出となるだろう。

現在進行形で、二人は、新たなスタートラインに立っているのだ。

そう、着実な1歩を踏み出そうとしている。

人は、こうして、成長していくのだろう。

築き（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。
投稿が遅れ、ほんとにすみません。
次回はいつになるやら。

10年後（1）

とある部屋の1室。

何事かをぶつぶつ呟きながらパソコンのキーを叩く成年。

現在時刻は午前2時を過ぎている。

「ふー。今日はこんなもんか。」

呟きながら彼は伸びをした。

（これで、まー課長に叱られなくてすむかな）
と、その時。

「消えそうにー咲きそうなー」

かなりの大音量で、彼の携帯が鳴り響いた。

（おいおい）

心の中で苦笑しながら、彼は携帯に出た。

もしもし。

「もしもし。一弥？」

なんだよ、宮子？こんな時間にどうした？

「冷たいわねー。飯にも恋人からの電話なのに。」

あー、ごめんごめん。なんか最近ちよつと疲れててさー。

「疲れてるのはこっちも一緒よー。それよりね？聴いてよ。なんか最近さ、変な男が私に着いてくんのよ。もー、気持ち悪いったらありゃーしないわ。」

そー。

「そう。じゃないわよ。あなた飯にも私の恋人でしょー？なんかさー、そいつ許せねーえとか、守ってやるとか言えないわけー？」

そう言われてもなー。宮子って強いじゃん。合気道2段持ってるし、柔道も初段だろー？俺が守らなくても大丈夫じゃん。

「そう言う問題じゃないでしょ？もういい。あなたには期待しないわ。じゃ、ゆつくり休んでね。」

「なんだよ。」

ぷつりと切れた電話に、一弥と呼ばれたこの成年は悪態をついて、携帯を机に置いた。

彼と宮子は大学時代の同級生だった。

ある日突然、宮子に想いを告げられ、困惑した一弥だったが、宮子の強い気持ちに動かされてつきあい始めた。

「さて、寝るか。明日も朝早いしな。」

そう呟いて、彼はベッドに潜り込んだのだった。

10年後(1)(後書き)

すみません。更新さぼりました(汗) これから少しずつがんばっていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7258c/>

届けこの想い

2010年10月28日07時13分発行